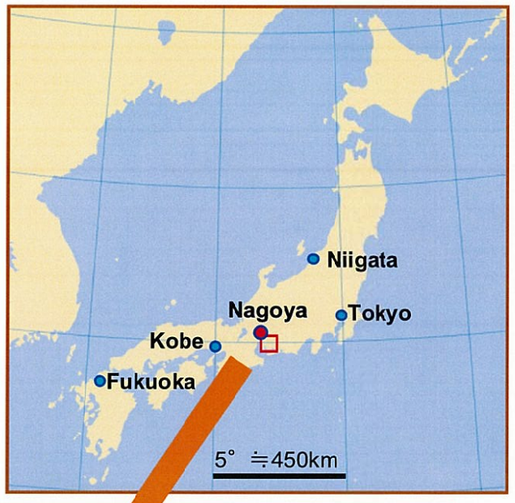
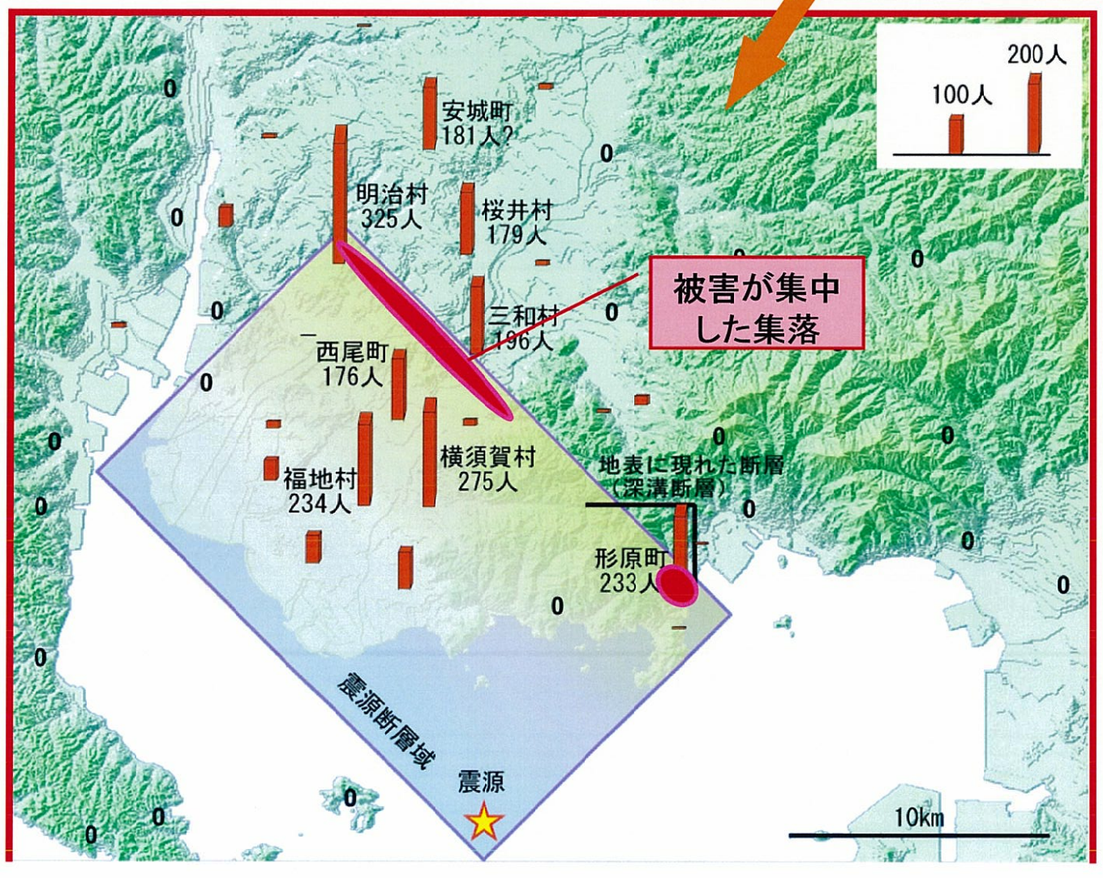
地域の被災体験を視覚化し、住民間で共有する試み

～地域の災害イメージを豊かにすることで、防災へ！

1945年三河地震

- 死者2306人
- 第2次世界大戦末期の報道管制下において、具体的被害報道が制限された。写真も少ない。





再度の震災も何ぞ
試煉に固む特攻魂
敵機頭上、逞しき復舊

決戰に手を拔くな
比島思へば增産一途

三河地震インタビューをした方々とその被災場所

24件
2007年9月現在

鈴木敏枝 さん

当時15歳（姉）

沓名美代 さん

当時11歳（妹）

思わず石灯籠にしがみついた男子を、先生が注意した。事なきを得た。

周囲は、壁土のほこりとにおいで一杯だった。生き埋めになった人の「助けて，助けて」という泣き声がだんだん小さくなっていった。布団をかぶって震えていた。

となりのおばさんが「火事だ！」と叫んだので、駆けつけて水で消した。しかし、火だと思っていたのは、仏壇が月明かりに照らされて光っているだけだった。

家は全壊した。極寒の中、着のみ着のまま、素手・素足で朝から夜まで片づけをした。親せきもひどい状況で、誰も助けてくれる人はいなかった。

周囲で倒れなかったのは一軒だけだった。地割れのなかには、壊れた瓦を捨てた。

外にかまどを作り、隣組で共同で炊事した。農家で井戸もあったため、食糧と水には不自由しなかった。地震で死んだ牛も食べることができた。

1週間ほど経って落ち着いたとき、ふすまや雨戸を外して、四面に囲って縄でしばって「ふすまの家」を作った。家の中まで雪が入ってきて、本当に寒かった。

父がお風呂を作り、近所の人全員が来た。半月ぶりで、とてもうれしかった。

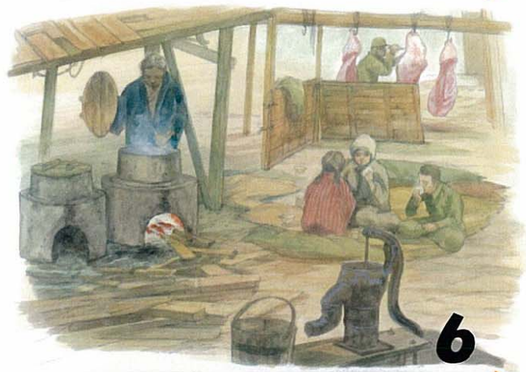
廃材でわらぶき小屋を作った。家の中で寝られるようになり、とてもうれしかった。

学校も倒壊したが、空地に縄を張り、首から黒板をさげて授業が再開された。

教材をつくる

妹：沓名美代さん　姉：鈴木敏江さん
（当時11歳）　（当時15歳）

時間の流れ



に負(ま)けない！

ぼくたち・わたしたちの

地震必勝(じしんひっしょう)マニュアル

2008年7月11日

安城市立(あんじょうしりつ) 志貴小学校(しきしょうがっこう)

1 体験者のお話を復習しましょう。

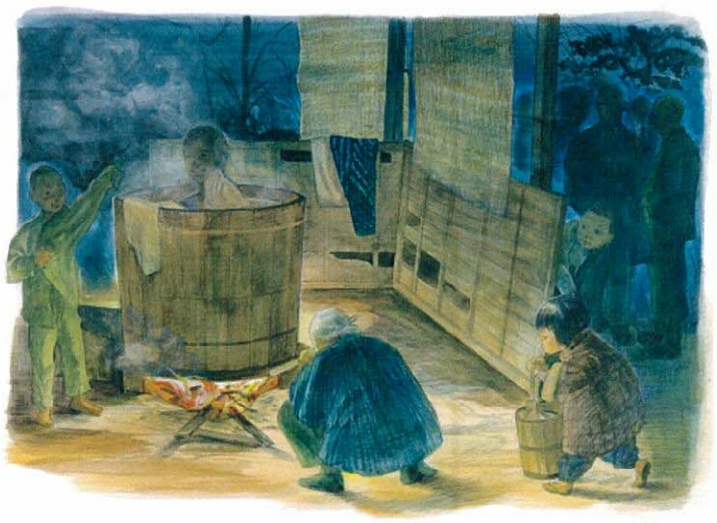
沓名美代さんは、地震でどんな体験をしたのでしょうか。
絵をヒントにして、思い出してください。

1）神社にいるときに地震が起きました。その時に、男の子がとても危険なことをして先生に怒られました。男の子はどんな危険なことをして怒られたのでしょうか。

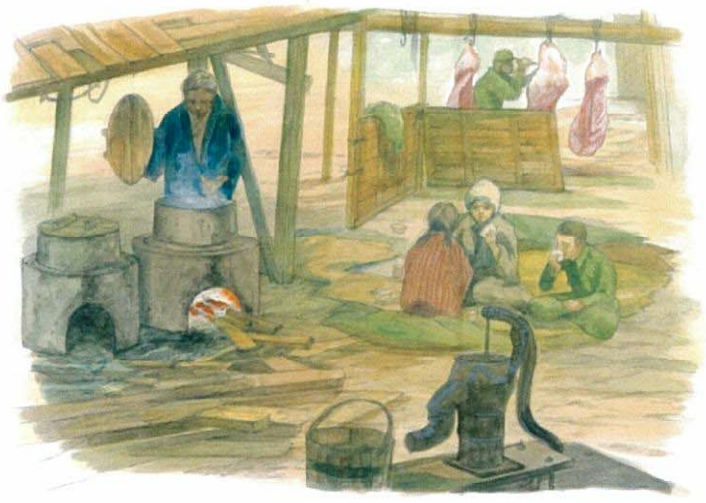
2）夜の地震で、ふだん住んでいた家は全壊したのに、家族は誰も亡くなったりケガをしたりしませんでした。なぜ、みんな無事だったのでしょうか。

3）近所で１軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか。

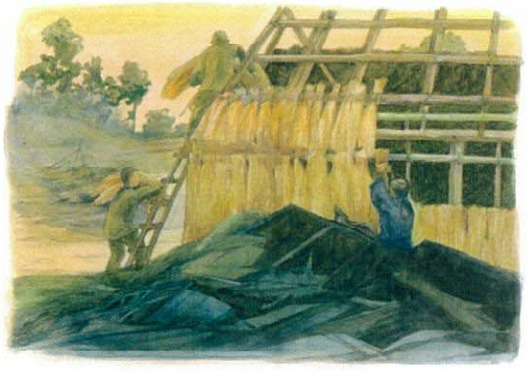
4）地震が起きた後、朝から夜まであることをしていたため、半月ぶりにお風呂に入ったときには体は真っ黒でした。朝から夜までどんなことをしていたのでしょうか。



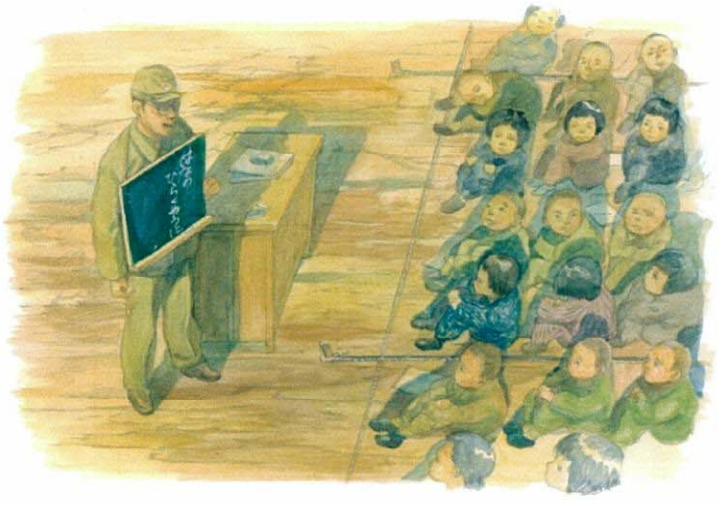
5）地震が起きた後も、水や食べ物がなくならなかったのはどうしてでしょうか。

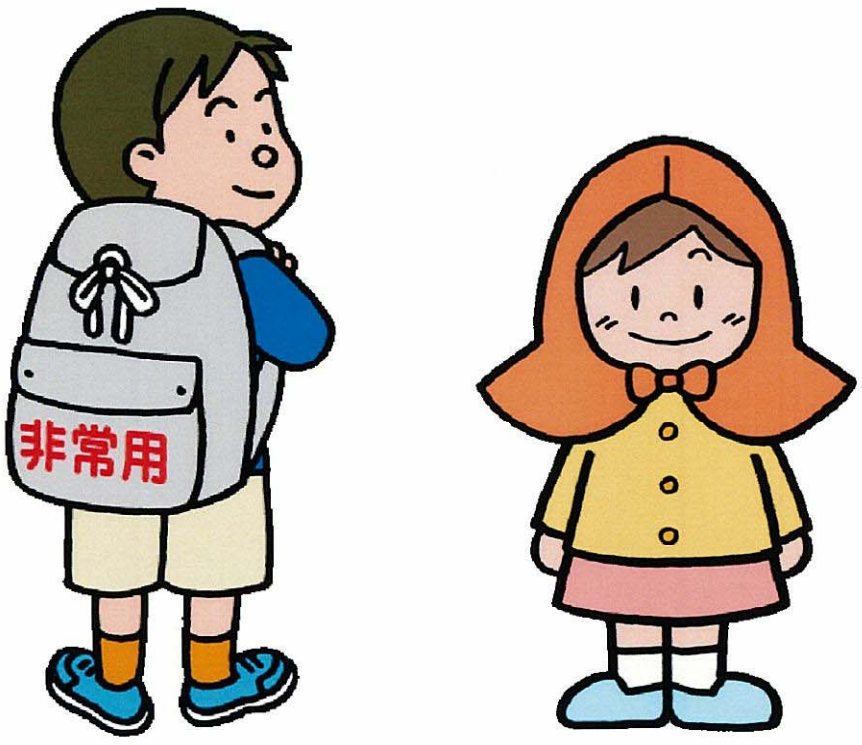


6）地震から１ヶ月後に、ようやくちゃんとした家を建てることができました。
それまでは、夜はどんなところで寝ていたのでしょうか。



7）学校は地震で壊れてしまいました。教室はどこに作って、授業はどんな方法で行っていたのでしょうか。





©朝日新聞社 2008年
45655号（日刊）

2008年（平成20年）
12月3日
水曜日

朝日新聞

「地震必勝マニュアル」で子供たちが解いた課題の一部

1945年の大地震 戦時下、実態伝わらず

三河地震の教訓 学んでドリル

名大、安城の3小学校で授業

半世紀以上前の三河地震で被災した体験者の話を後世に伝える活動が、名古屋大を拠点に始まった。名古屋大学災害対策室の林能成助教＝現在、静岡大防災総合センター准教授＝(40)と、同室専任の木村玲欧助教(33)が今年から安城市の小学校で始めた取り組みだ。（柿崎隆）

三河地震は、1945年1月、昭和東南海地震があった約2カ月後に起きた内陸直下型地震。現在の安城市や西尾市、一色町などを中心に大きな被害があり、約2300人が犠牲となった。しかし、戦時中の旧日本軍による報道制限で、被害の実態はほとんど伝えられなかった。このため、林氏らは当時の被災者を探し出し、粘り強く話を聞くなどした。

木村助教らは聞き取りの中で、「話してはいけないことだと今まで本気で思っていた」と話した高齢者が多かったことに注目。情報統制がいびつに影響し、地震の記憶と教訓が地元でさえ伝えられていないことを実感した。今年夏ごろから、安城市の志貴、祥南、桜林の三つの小学校に協力してもらい、被災当時に小学生だった人たちの話を子供たちが直接聞く授業を始めた。おもに5、6年生が約2時間聞いて、さらにただ聞きっぱなしにするのではなく、体験談から何を教訓にすべきかをドリル形式でまとめる「必勝マニュアル」を作らせた。

例えば、「1軒だけ倒れなかった家があったのはなぜか」「地震のときにどんなことをするのが危ないのか」といった防災意識向上に直接つなげるねらいをもった課題や、「地震で人が死んでしまうのはどのような理由があるか」といった形で、人間の生死まで含めて考えてもらう課題もある。12月から来年1月にかけて、防災の観点から木村助教がフォローする集会も行う予定という。

木村助教は、「被災経験者が高齢化し、今が地震の記憶を後世に伝える最後の機会。子供たちが自分たちの祖父母にさらに聞くなどして実感を持ってもらい、将来に備えることにつなげたい」と話す。

地震必勝マニュアルで出された課題

・近所で1軒だけ地震で倒れなかった家があった。なぜか。
・地震から1カ月間、被災者はどんな家で寝ていたか。
・地震のとき、どうすれば自分の頭と体を守ることができるか。

（解答例）
→すじかいを入れていたから。
→わらで組んだ家、ふすまや雨戸を組み立てて作った家など。
→机の下に潜る。机がないときは座布団や衣服で守る。

児童ら被災体験聞く

木村助教（右）が司会を務め、地元住民が三河地震を経験した当時の話をした＝7月、安城市の志貴小学校、木村玲欧助教提供

子どもたちの「思い」を育てる

鈴木敏枝様
沓名美代様へ

今日、防災で地震の体験の話をしてくださってありがとうございました。昔は、農地の人がたくさんいたので、地震がきて家がくずれてしまったけど、米とか牛の肉や水があったのでよかったと思いました。それから、お二人のお父さんがすごいと思いました。家がかたむいているから、ざしきでねようと言ったところがすごいと思いました。これから、いつ地震がくるかおかしくないので、家がくずれても二人みたいに生きていきたいです。　神谷美乃里より

鈴木敏枝様
沓名美代様へ

敏枝様、美代様やさしくわかりやすく地しんのことを話して下さりありがとうございました。わたしは、地しんの話を聞いてとてもこわいなと思いました。また、地しんがおきたあとの大変な生活もわかりました。わたしは自分の命を守るため地しんがおきた時気をつけたいと思いました。今日は本当にありがとうございました。
三ッ矢菜々子より

鈴木敏枝さん
沓名美代さんへ

7月1日の金はじしんの事を話してくださってありがとうございました。経験者からじしんの事を聞かせてもらったのですごくきょうみをもってきました。敏枝さん美代さんはじしんをけいけんしてその後どうしたかもしっかりおぼえています。金曜日に話してくれたことは家族や妹におしえてあげました。また聞くきかいがあったら聞きたいと思います。
鈴木靖弘より

鈴木敏枝さんへ沓名美代さんへ

泉町からわざわざ来てくださってありがとうございました。お話は、地震について考えさせられました。私たちのクラスは、本当はもっとうるさくて、とても集中して勉強ができる所ではありませんでした。けれど、地震の話を聞いているときは、とても静かでした。それは、とてもいい話をしてくれたからだと思います。ありがとうございました。中根可南子より

敏枝さん・美代さんの前にいたのがわたしです。

地震に負けない！（11月15日志貴小学校学芸会）

劇は被災姉妹の想起のかたちで進行する

４場面：三河地震の発生

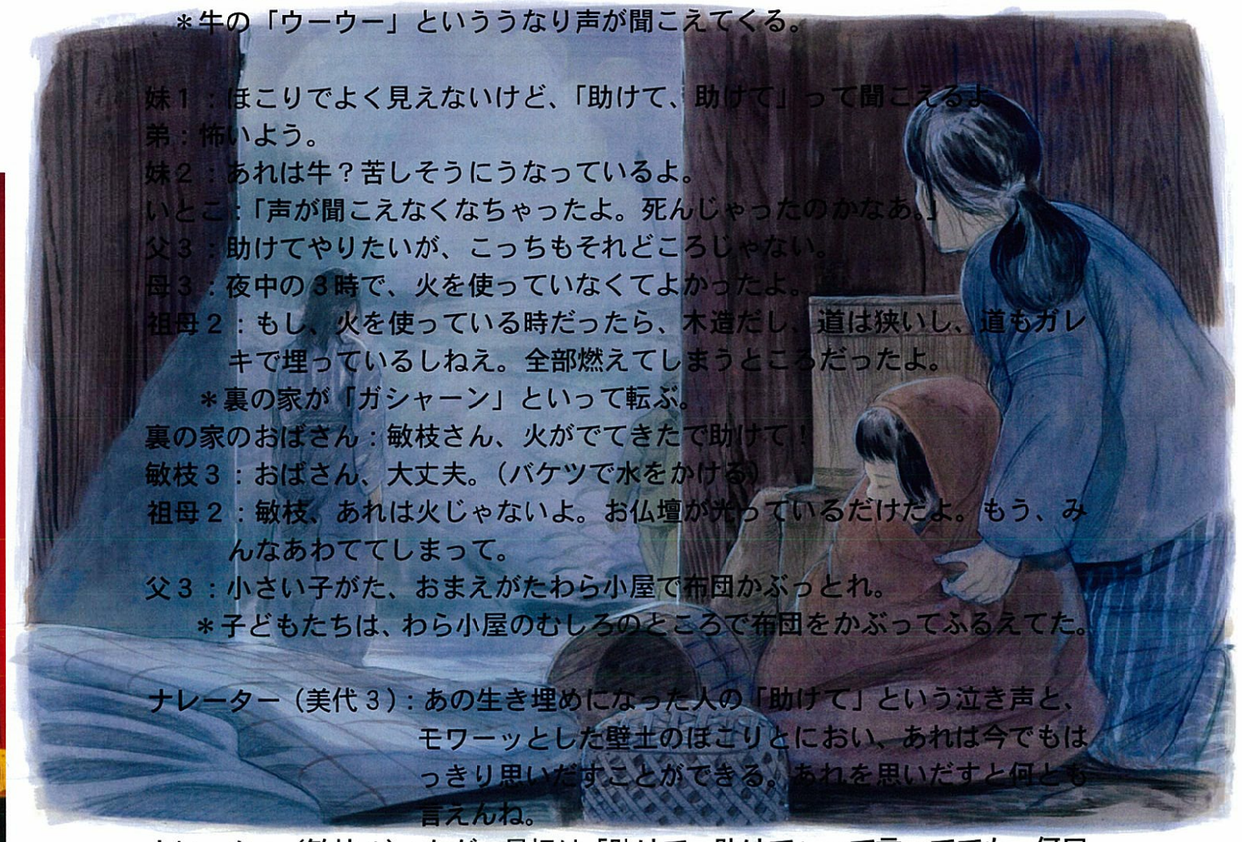
ナレーター７：昭和２０年１月１３日　午前３時３８分　三河地震が発生しました。おばあちゃんといとこは長屋、わたしたちは横屋の座敷に寝ていました。

効果音：ゴー、ドンドンドンドンガーン、ガッシャーン

父３：外へ出なあかん！
祖母２：みんな大丈夫かい。
美代２：ほこりがすごくて、目が痛い。
敏枝３：ほこりがすごくて、息ができない。
母３：壁土のほこりがすごいねえ。みんな袖を口にあてて、なるべく吸い込まないようにね。

＊あたりから、生き埋めになった人の「助けて、助けて」という声が聞こえてくる。
＊牛の「ウーウー」といううなり声が聞こえてくる。

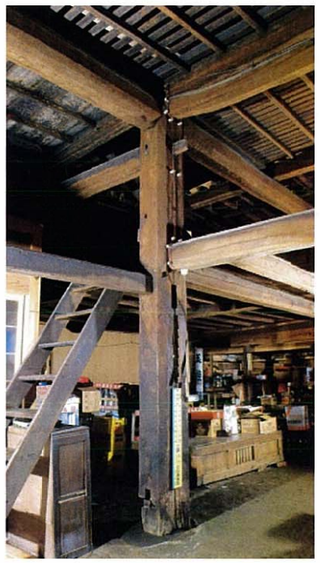
妹１：ほこりでよく見えないけど、「助けて、助けて」って聞こえるよ。
弟：怖いよう。
妹２：あれは牛？苦しそうにうなっているよ。
いとこ：「声が聞こえなくなちゃったよ。死んじゃったのかなあ。」
父３：助けてやりたいが、こっちもそれどころじゃない。
母３：夜中の３時で、火を使っていなくてよかったよ。
祖母２：もし、火を使っている時だったら、木造だし、道は狭いし、道もガレキで埋っているしねえ。全部燃えてしまうところだったよ。
＊裏の家が「ガシャーン」といって転ぶ。
裏の家のおばさん：敏枝さん、火がでてきたで助けて！
敏枝３：おばさん、大丈夫。（バケツで水をかける）
祖母２：敏枝、あれは火じゃないよ。お仏壇が光っているだけだよ。もう、みんなあわててしまって。
父３：小さい子がた、おまえがたわら小屋で布団かぶっとれ。
＊子どもたちは、わら小屋のむしろのところで布団をかぶってふるえてた。



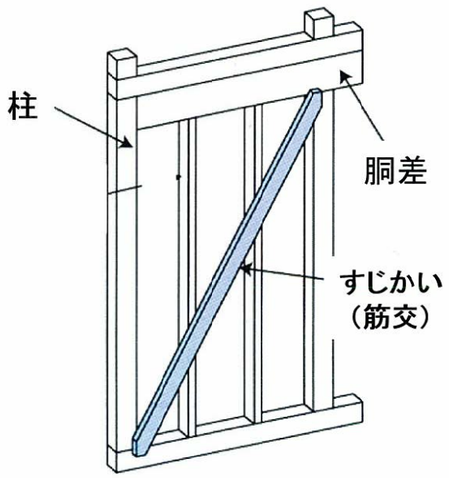
ナレーター（美代３）：あの生き埋めになった人の「助けて」という泣き声と、モワーッとした壁土のほこりとにおい、あれは今でもはっきり思いだすことができる。あれを思いだすと何とも言えんね。

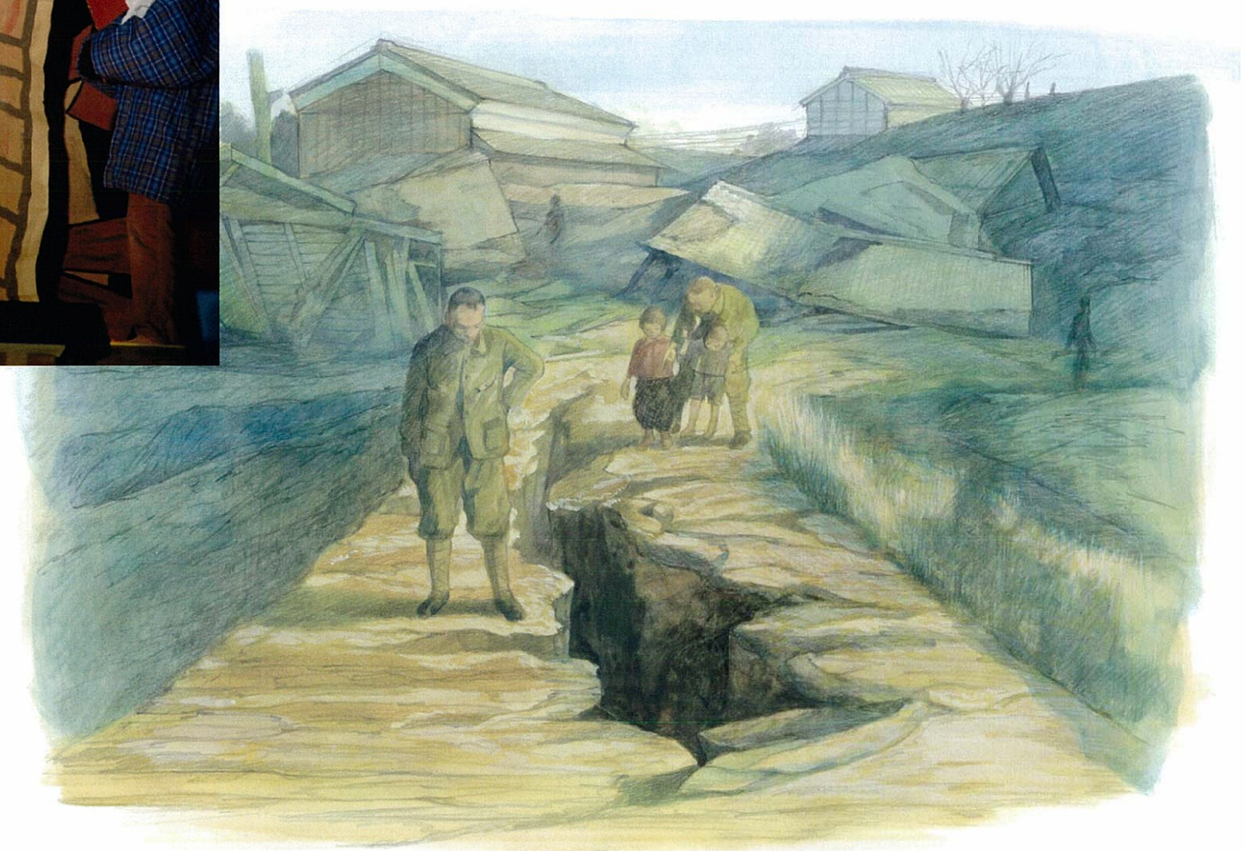
ナレーター（敏枝４）：ただ、最初は「助けて、助けて」って言ってても、何回

筋交いのはいった家



むかしのいえ





3）近所で１軒だけ、地震で倒れなくて無事だった家がありました。なぜ、その家だけ倒れなくて無事だったのでしょうか。

生活を建てなおす

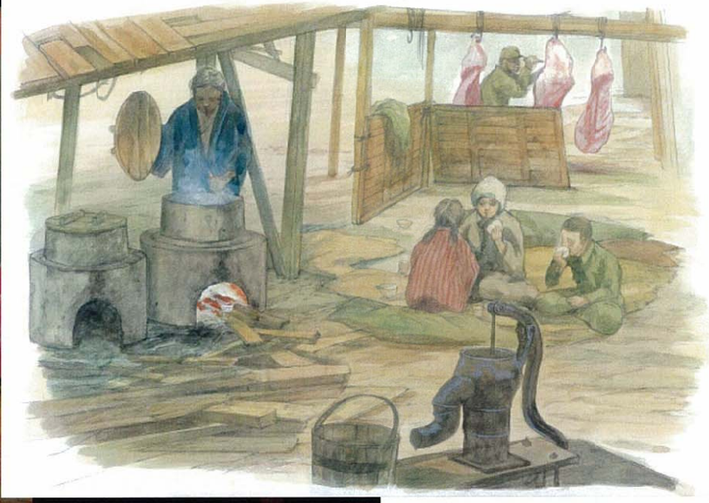
後かたづけ

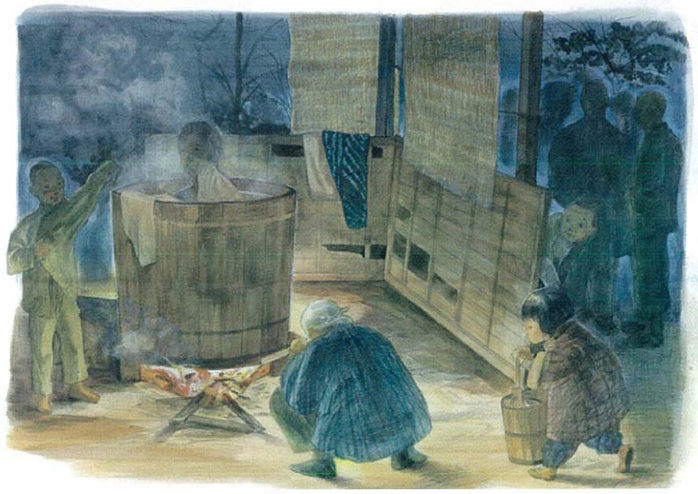
親せきも被災者

水と食べ物

みんなでご飯

お風呂





わたしたちとお客さんの感想

最後に絵を写しながら合唱

1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

昔の人はおたがい助け合ってていいなと思いました。ごえもんぶろも近じょの人がきてもいれていたし、ごはんのときも当番がきたら、ごはんを家族みんなでやっていていいなと思いました。今は、みんなが自分の意見をまちがえて、助け合うことがあまりでこない人を出てくると思います。人を思いやれる人が増えてほしいなと思いました。

1　聞いた話を実際に演じてみて感じたこと

実際に演じてみて本当にこんなことがあったなんて思うと、こわくてこわくて。でもこの大変さとこわさをみんなに知ってもらえておかったです。この思いを知ればどういう備えをすればいいかわかってもらえたと思います。

お客さん（右下が被災者の敏枝さん・美代さん）

・連合町内会長「町内にある井戸の総点検を４月以降に行う」

・家族：家族防災会議の開催と防災ハンドブックの作成